

指揮者

Kazushi Ono

大野和士

最近日本人指揮者の海外での活躍が、以前にも増して目立っている。中でも大野和士さんは、二〇〇二年よりベルギー王立歌劇場（モネ劇場／造幣局の跡地に建設されたことから「お金」を意味する「モネ」の愛称で呼ばれる）の音楽監督を務め、二〇〇八年九月からは、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者に就任する予定である。また、二〇〇七年六月にオペラの殿堂ミラノ・スカラ座へデビュー、「ムツエンスク郡のマクベス夫人」（シヨスタコーヴィチ作曲）を、十月には、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場で「アイーダ」をそれぞれ大成功に導き、大きな話題を呼んだ。その大野氏がどのように扉を開いていったのか、インタビューした。

「音楽で心の窓を開く」

どんな巨匠も音楽には頭を垂れる

——大野さんのキャリアは本当に多彩ですが、中で最も大きな転機となった出来事からお聞かせください。

大野 私 の 転換期 といいますか、自分自身をもう一度見つめ直す機会になったのは、一九八五年から数年間のミュンヘンの留学時代でした。その時分には、日本で培ってきたことに対してそれなりの自信もあったし、「やってやるぞ」という意欲に満ちていました。

しかし、すぐに自分の甘さを痛感することになりました。私がアシスタントをしていたミュンヘンのバイエルン州立歌劇場では、大指揮者ヴォルフガング・サヴァリツシュ、カルロス・クライバー、ジュセッペ・パタネーの各氏が、ミュンヘン・フィルハーモニーでは伝説的指揮者のチェリビダツケ氏が活躍中でした。偉大な指揮者

の音楽に対する姿勢を目の当たりにしまして、自分の今まで考えていたことのスケールの小ささを思い知らされてしまったのです。

私が出会ったこのようなマエストロたちは、それぞれ大変個性が違う方々ですが、高き頂を目指す登山口が違っただけのようにも思えました。みな、*「再現芸術家」*として、いかに作品の本質の^{こころ}前（まへ）に頭を垂れるかに徹している。作曲家の魂と会話をするために、滅私奉公のような形で、自分の才能を注ぎ、日々研鑽（けんさん）を重ねているわけです。あのマエストロたちでさえも。

——自らを音楽に捧げるといふことですね。

大野 私自身、本当に一八〇度考え方が変わったと言っても大げさではないと思います。一方では、指揮者としてやっていくこととすると、優れた指揮者のリハールと

見ているだけでは駄目だ、という現実もありました。どんな団体でもいいから、とにかく本当のオーケストラや生の合唱団、生身の人間との接触を通して、指揮の技術を磨くに勝ることはないというカラヤンの至言があるほどです。しかし、なかなか若い指揮者にオーケストラを振るチャンスはやって

コンクールで飛躍のチャンスをつかむ

——それをなんとかして打開しようとなさったわけですか。

大野 その手段がコンクールでした。コンクールは、同じような悩みを抱えている、同じ世代の人間が集うという意味でも非常に良い機会です。悶々とした者同士の共同生活を強いられるわけで、もちろん牽制し合うこともありますが、その中で切磋琢磨する経験を積むことができました。それも私にとっては大変大きな出来事でした。

きてくれません。留学時代というのは、そういう意味では、自分の存在を確認するすべもないというような形の環境に初めて自分を置くということになったのです。そこで、自分の内面の中の想像力というのを広げる努力をしないと、自分がどんどん小さくなってしまふという危機感を覚えました。

特に、八七年に受けたイタリア・パルマのトスカニーニ国際指揮者コンクールは、最初の一週間、まず六〇人が集められ、そこで第一次選考が行われて六人が選ばれ、その後、その六人が二ヵ月間にわたりある先生の講習を受けるという贅沢なコンクールでして、その六人が、毎日パルマにあるオーケストラを指揮しながらその年のいろいろな課題曲について考えるのですが、指導者だったロシア



人の先生は大変ユニークな方で、「指揮というものはあなたの人格そのものである」ということを、口を酸っぱくして言われました。

結局、自分自身の内面的なことを充実させるということ自体が、指揮者として指揮台に立ち、自分は音を出さないという特殊な立場でありながら、一〇〇人の人に音を出す衝動や必然性を感じてもらおうということにつながるのです。音楽そのもの、あるいは、それにまつわるいろいろなことを学ばわけですが、それがやがては自分の中に沈潜していくという過程を自分に課すということですね。それが指揮者になることだよというのを、二カ月間、怒鳴られながら教わりました。それは消耗する二カ月間で（笑）。そして、そのコン

クールで賞を頂いたところに、自分の指針が見えてきました。

——これからどういうことをやっていったら自分が指揮者として成長できるかが見えてきたということですか。

大野 そういうことですね。その後、これからの進路について考えていたときに、たまたまザグレブのオーケストラからオファーがありました。ヨーロッパのオーケストラと一緒に仕事ができるという環境を与えられたのですから、とてもラッキーでした。

——ただ、その後長く続くユーゴスラビアの紛争に巻き込まれてしまいました。

大野 初めて行った八六年はまだ紛争前でした。当時のザグレブの雰囲気は日本と比べて、ある意味

で極端に違いました。時が非常にゆっくりと流れていて……音に關して言っても、機能的、つまり技術的に精密な日本やアメリカのオーケストラに比べると、その環境

を反映した音でした。人肌の音でも言うのでしょうか。そういうオーケストラに出会えたということとは、私にとっても貴重なことでした。

危機だからこそ人間は音楽を求める

——確かにヨーロッパでも、ロンドンとか、パリのオーケストラより、ザグレブのオーケストラのほうが流れる時間はゆったりしていたかもしれません。

大野 ちょうど八六年から内戦が勃発するまでの時期というのは、多民族国家ユーゴスラビアを何とかまとめていたチトー大統領最後の置き土産みたいな時代だったのですから。共産党の社会主義的な経済政策の最後の状態で、ある程度、西側とのつながりもチトーの政策上保たれており、風通しのよさみたいなものもありまして。まさに東と西の融合地点だったといえるでしょう。しかもスラブの国とは言いながら、南の和やかな雰囲気というのもありました。もとがウィーンの文化圏でしたし。

私が初めて行ったころのザグレ

ブ・フィルには、若いころウィーン交響楽団に在籍していた首席フルート奏者がいて、ブルーノ・ワルターの指揮で吹いたことがあるなどという思い出話をたくさん聞きました。そういうことも大きな財産になったと思います。

そうこうしているうちに、戦争が始まりました。クロアチアが独立を宣言し、セルビアとの間に戦争が勃発したのです。西側のメディアでは、ユーゴ内戦という言い方がされていましたが、クロアチアやスロベニア、ボスニアの人々は、最初から「戦争」と言っていました。

戦争の最中は、戦時中の日本もそうだったでしょうけれど、爆撃の対象にならないように夜になると灯火管制が敷かれるんです。ところが、そういうときに皆さん

おおの・かずし●1960年東京生まれ。東京藝術大学にて指揮を学ぶ。バイエルン州立歌劇場にてヴォルフガング・サヴァリッシュやジュセッペ・パタネー両氏に師事。1987年、アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝。1988年～1990年ザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者、1990年～1996年同管弦楽団音楽監督、首席指揮者を務めた。1992年～1999年、東京フィルハーモニー交響楽団の常任指揮者を経て、現在、同楽団桂冠指揮者。2002年8月よりベルギー王立歌劇場（モネ劇場）の音楽監督を務める。渡邊暁雄音楽基金音楽賞、出光音楽大賞、芸術選奨文部科学大臣賞など受賞歴多数。2006年6月には大野和士指揮モネ劇場オペラ公演がフランス批評家大賞、ヨーロッパ大賞をダブル受賞した。

が、寒い中襟を立てたコートを着て、黙々と会場に来るわけですね。驚くべきことに一度も定期演奏会が中止にならなかったのです。なぜかという、会場はいつもよりいっぱいになっていましたから。

当然、オーケストラの楽員たちも聴衆に伝えなければいけないと演奏会に臨む。いろいろなリスクを覚悟で来てくれる客演指揮者やソリストたちに感謝をしながら。聴衆は毎回熱狂的に拍手をして、終わったらまたひっそりと灯火管制の中を帰っていくわけですね。

その時点ではナシヨナリズムというものが発端となって戦争が勃発したのですけれども、コンサート会場がどういう状況であったかと言うと、指揮者は日本人、ソリストはロシア人、そして、実はオーケストラのメンバーの中にはクロアチア人の他、戦争相手であるはずのセルビア人も、スロベニア人もいました。ということは、そこにあったのはインターナシヨナリズムなんです。

この国はナシヨナリズムで揺れているけれども、私たちはそれを音楽の力で、あるいは音楽を国が

違う人々と手を取り合ってやるという現実を以て超越しようじゃないかという気持ちがありました。ある演奏会で、ブラームスの交響曲第三番を指揮した時のことです。アンコールに应运えて、まずは交響曲の第三楽章の悲しい旋律の曲を演奏しました。その際、私は「すべての戦争の犠牲者のために」と申しました。敢えて「クロアチア」とは言いませんでした。その後にもう一曲、今度は私たちの未来のためにと言って、華やかで力強いブラームスの大学祝典序曲を演奏したのです。演奏が終わった時のお客様の大変な拍手と歓声は今でも忘れられません。

この出来事を通じ、人間の尊厳というものが脅かされる危機のと

きにこそ、人は人である証しを求めに来るということを痛感し、そ

東洋人だから発見できる西洋音楽の違い

のためにも自分はこの職業を続けたいというふうに思いました。

——東洋人として西洋音楽をやるというのは、これは本当に大変なことだと思うのですが、大野さんはかねてから、それはハンディではないとおっしゃっていますね。

大野 私 が物心ついたとき、最初に音楽として認識したのは、西洋音楽でした。私の世代ですと、それが逆に自然だったと思います。逆に言うと、日常的に日本の伝統音楽を聴く機会の方が圧倒的に少なかった。今となって自分では恥ずるところなんです。

さて、音楽をより深く勉強する

という次元になりますと、その音

楽とその時代の社会的なバックグラウンドとか、あるいは、オペラのように台本や原作がある場合はその原語で勉強する必要があります。でもこれは東洋人に限ったことではありませんが、例えばドイツ人が、フランスの原作の小説をもとに、ロシア人が作曲した作品を解釈しようとするれば、やはり相当回り道して勉強しなければならぬでしょう。

私の場合には、二〇歳を過ぎるまで日本におりましたので、そう





なると、言語的な意味でも適應するのは大変です。

——私もよくわかります。

大野 一方で、私がヨーロッパで実際に思ったのは、ドイツの人たちにとって未だにフランス音楽は遠いものであるということ。逆もまた真なり。フランスのオーケストラがベートーヴェンを演奏するときに、土台とか枠組みという観

点からしますと、決して一朝一夕に堅固なものにはならない。イタリアも、ロシアも違う。それぞれに遠いのです。

今や、そこに属さないが故に逆に違いがより見えるということが、私には大変なメリットなのだと達観するに至っているわけですから。(笑)。

音楽によって日本や世界に貢献したい

——大野さんはもう二〇年ぐら

い、日本と海外を行ったり来たりしていらつしやいますが、その大野さんからご覧になった日本はどのような国に思われますか。

大野 ヨーロッパの人と話していて、日本のことが話題になると、よく、グループ・オリエンテッド・ソサエティーという言葉が出てまいります。結局、平たく言う、横並びの社会。教育の程度も含めまして、非常にスタンダードが高いということが、その中には当然含まれています。そういう意味での日本の長所というのは、八〇年代を通じて世界に知れ渡っ

ています。

一方、横並びの社会ということの中には、必ずしも肯定的なニュアンスばかりではないということには、容易にわかることだと思えます。ただ、それでも八〇年代は経済的、文化的に日本が力を持ち、注目もされた時代でした。最近はその注目が中国に移ってしまいましたね。

——文化的にもやはりそういう感じがあります。

大野 あります。エネルギーが失われてきてしまっている。ところが、そうは言いながらも、もう一度グループ・オリエンテッド・ソ

サエティーということに戻りますと、まだまだ一人一人の日本人の力というのは大変高いと思えます。ですからきっかけさえあれば、より肯定的でアクティブな方向に転換するということは可能なのではないでしょうか。

それをリードする社会のシステムを再構築することが急務でしょうね。

——何かヒントはありますか。

大野 私の携わっている職業的な観点からすると、こういう状況だからこそ、より一人一人の個性——その一人一人の個性とは、他人に個性があるということを認識することによって、より自分の個性を確認することができるというような意味においても、「他者」というものを意識するがゆえの自己」という意味です——を、もつとものと社会の中で育てる必要があるでしょうね。

これは、恐らくいじめの問題とか、そういうことにも関連して、くると思います。もし音楽家として、この点で貢献できるとすれば、それは願ってもないことです。

私が音楽家になろうと思ったの

は比較的小さいころで、音楽を聴いていると、自然に床を転がっていたりしたんです。また、燕尾服のつもりでちゃんちゃんこを着て、お箸を振って指揮者の真似をしていました(笑)。とにかく音楽を聴く、それを感じるということにおいて、何かしら自分の体が動いてくるというか、解放されていくというか、人間として生まれた幸せを子供ながらに感じていました。

音楽で心の窓を開ける。それによって、生きているということを確認する、より強く自覚していく。そして、開かれた心の窓を通して他者と語り合うということですね。自分が子供のころから大好きだった音楽によって日本や世界にこの窓をひとつでも多く築いていくこと、それが、私自身が生きているということにはかならないと思っています。

——その分野での活躍も期待しております。本日はどうもありがとうございました。